

所 報

題字：武田満之校長（平成9年、野幌中学校）

第196号 令和8年1月16日

江別市教育研究所所報

江別市高砂町 24-6 TEL381-1058

（主な内容）

・R7年度学力向上策ヒアリング報告について

令和7年度学力向上策ヒアリングを終えて

江別市教育委員会
学校教育課指導主事

本年度の「学力向上策ヒアリング」を9～10月に実施しました。大変ご多用の中、校長先生、教頭先生はじめ主幹教諭や教務、研究、学力向上等の担当の先生方の出席をいただきました。各学校の実態を踏まえた特色ある学力向上の取組について伺うことができ、誠に有難うございました。

江別市の令和7年度全国学力・学習状況調査の結果、江別市学校改善支援プランより課題改善策の一部抜粋、小・中学校の学力向上の取組の一部を紹介させていただきます。
なお、全国学力・学習状況調査の詳しい結果は、江別市教育委員会のホームページに掲載しています。

1 令和7年度 全国学力・学習状況調査の江別市の調査結果

〔平均正答率：単位（％）〕 ※中学校理科はIRTスコア

	小 学 校			中 学 校			備 考
教 科	国語	算数	理科	国語	数学	理科	
江別市	69.1	59.2	61.5	55.0	47.4	520	北海道及び江別市の正答率は、道教委、江別市教委が独自に算出した結果です
北海道	65.4	55.2	56.3	54.0	46.7	505	
全 国	66.8	58.0	57.1	54.3	48.3	503	

<教科に関する調査結果>

- 小学校6年生は、国語・算数・理科ともに全道・全国平均を上回っています。
- 中学校3年生は、国語・理科は全道・全国平均を上回っています。数学は全国平均をやや下回りましたが、全道平均を上回っています。

<質問紙調査に関する結果の概要>

- 「授業中の私語が少なく、落ち着いていると思う」割合は、小学校・中学校とも100%（中学校5年連続100%）で、全国平均を大きく上回っており、江別市の小中学校は大変落ち着いた状態にあると言えます。
- 「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」割合は、小学校、中学校ともに全国平均を上回りましたが、100%には未だ届いていません。各学校で行われているいじめをなくす取組はもちろんのこと、道徳教育や人権教育の取組、自己有用感を醸成する取組等、根気強く継続して行うことで、割合を高めていく必要があります。
- 「自分にはよいところがあると思う」割合は、小学校は全国平均と同等で、中学校は全国平均を下回りました。「先生はあなたの良いところを認めてくれていると思う」割合は小学校では全国平均と同等ですが、中学校では全国平均を下回りました。各学校で行われている自己肯定感を育む取組をさらに充実させていく必要があります。
- 「児童生徒が課題の解決のために自分で考え、自分で取り組んでいる」割合は全国平均と同等でした。また、「自分の考えをうまく伝えるよう、資料や文章、話の組み立てを工夫して発表している」割合は小学校では全国平均と同等でしたが、中学校は全国平均を下回りました。「他者と情報交換して話し合ったり異なる視点から考えたり協力し合ったりできるように学習課題や活動を工夫した」割合は小中学校とも100%でした。全ての小中学校で子どもが主役の授業づくりを推進しています。
- 「ICT機器を活用した授業を週3回以上行った」割合は、学校質問紙では100%、児童生徒質問紙では小学校、中学校ともに全国平均を上回り、ICT機器を活用した授業が積極的に行われています。また、文章やプレゼンテーションを作成したり、情報を整理し資料を作成したりするなど、児童生徒がタブレット端末を多くの場面で活用し、スキルアップしている様子が見られます。
- 「前年度までに、近隣等の中学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定等、教育課程に関する共通の取組を行った」割合は、小学校、中学校ともに100%で、全国平均を大きく上回り、小中一貫教育の柱の一つである「系統的な指導」の充実に向けた取組が進められています。
- 「コミュニティ・スクール等の取組は『社会に開かれた教育課程』の実現に効果がある」割合、「学校と地域や保護者との相互理解が深まっている」割合は小中学校ともに100%で

全国平均を上回っています。学校から見ると地域や保護者との理解が深まっていると言えますが、地域や保護者の意見を学校運営に反映するためにはコミュニティ・スクール等の取組のさらなる充実が必要です。

2 調査結果から見られる課題の改善のために

(令和7年度「江別市学校改善支援プラン」より)

(1) 全国学力・学習状況調査・NRT 学力検査

全国学力・学習状況調査では、小学校6年の全教科、中学校3年の理科は全国平均を上回りましたが、中学校3年の国語は全国平均とほぼ同等で、数学は全国平均を下回りました。領域別では、小学校6年の全教科はすべての領域で全国平均を上回りました。中学校3年は国語・数学の領域で全国平均を上回りましたが、もしくはほぼ同等でしたが、数学の「データの活用」は全国平均を下回りました。

NRT 学力検査では、小学4,5年は国語、算数ともに全国平均をやや下回りました。小学校3年は国語が全国平均と同等でしたが、算数はやや下回りました。中学2年は英語は全国平均と同等でしたが、他の4教科は全て全国平均をやや上回りました。領域別集計結果では、多くの学年で全国平均以上の項目がありますが、小学4年国語と小学5年算数は全領域で全国平均を下回りました。特に小学校5年算数の『データの活用』は全国平均を大きく下回っています。

2つの調査で共通して言えることは、「根拠を明確にして説明したり書いたりする」力が弱いということです。自分の考えを説明したり対話したりする場面を意識的に多く設定し、説明や書く機会を増やしていく必要があります。また「データの活用」に課題が見られることから、表やグラフを読み書きする機会を増やすなど、指導の強化が必要です。

(2) 全国学力・学習状況調査 児童生徒質問紙

児童生徒は落ち着いて授業に臨んでいます。望ましい生活リズムの確立や家庭学習の定着に向け、学校と家庭が緊密に連携した取組を継続する必要があります。自尊意識を問う設問では、小学校6年、中学校3年ともに全国平均を下回りました。教育活動全体を通じて、一人一人のよさや可能性を見だし、それらを発揮できる場を設定し、自己肯定感等を高める教育を続けていく必要があります。ICTを活用した授業は充実が見られ、発表スライドの作成など児童生徒の活用能力は飛躍的に伸びています。

(3) 学力向上策ヒアリング

各学校では、児童生徒の実態を分析し、それに応じた指導計画、学校改善計画を作成し、小中一貫教育を意識した系統的な指導を実施しています。一方で、児童生徒が主役といえない教師中心の授業を行っている教師も少なからず見られ課題となっています。ヒアリングでは、各校の学力向上の実践面を重点に見分し、単元の目標に迫る授業づくりを中心に指導・助言を行っています。

3 学力向上等の取組

(1) 学校改善プランの検証、作成

学校改善プランの作成は、全ての小・中学校で管理職主体ではなく、主幹教諭及び教務主任が中心となって作成し、職員会議や校内研修で共通理解の場を設けています。また、学力向上委員会等の特別委員会を設置していない学校が数校ありますが、既存の教育課程委員会や校務部会等を活用します。

各種学力分析については、小学校では学年で、中学校では教科部会で行っている学校が増えています。実際に指導している側が分析することで、これまでの指導の仕方や今後の指導について自分事として考えることに繋がり、その内容を全校で共有すること、また小中一貫教育の教科部会で共有することで、小中で弱点を重点的に指導するなど、先生方が積極的に学力向上に関わっています。

(2) 組織的な授業改善

各校の校内研究では、「主体的」「対話的」「伝え合う」「個別最適」の4つのキーワードの中からいずれかを、もしくは複数を盛り込んだ研究主題を立ち上げ、授業改善に取り組んでいます。研究主題の設定理由には、各種調査、アンケート等を活用し、子どもたちの実態を十分に分析し、より良い授業を提供しながら資質能力の確実な育成を目指した内容となっています。子どもが主役の授業づくりとはどうあるべきか。教師主導ではなく、子どもたちが自己調整しながら学びを深めていく授業づくりとはどうあるべきか。各校では研究部を中心に先生方も主体的・対話的な研究を進めています。

(3) 小中一貫教育の推進

教科系統表については、複数学年で繰り返し指導するポイントを明確にし、中学校区の課題を教科系統表に書き込むなど、小中の系統的な指導に向けた取組が進められています。

校内研究授業の指導案には、教科系統表の明記がある学校が増えてきました。一方、記載はなくても「単元について」の中で表記している学校もあり教科系統表を意識した教科指導が定着しつつあります。また、小中相互の授業参観を行っている学校も多く、特に学校教育指導訪問時には、中学校区で互いの特設授業の参観を行っています。江別第二中学校区・大麻東中学校区では授業参観後に研究協議に参加し、グループ協議で意見交換をしていました。子どもの様子がわかるだけでなく、互いの研究内容がわかり、自校の研究や指導に役立つと協議の中で発言がありました。